
仕返し(?)のX'mas

angel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仕返し(?)のX, mas

【著者名】

N6038F

【作者名】

angel

【あらすじ】

新一と快斗は蘭と青子にデートをドタキャンされる。そのことに腹が立つた2人は? いろんな人を巻き込んでのクリスマスどうなるのか?

file1・初雪（前書き）

この作品は、ハロウインの続きです！！
でもあまり関係ないんですけどね・・・

感想・評価お待ちしています！！

今日は12月1日。外では雪が降っている。東京にしては珍しい。新一がそう思つているとき、1本の電話がかかってきた。

「もしもしし、工藤か？」

その声の主はいきなり切り出しつづいた。

「ああ。つてか、俺にかけてきたんなら自分の名前を先に言えよ。」

「言つたらかっただか？言つた気がするんやけどなあ」

「言つてない！！一度もな！」

新一は少しキレていた。別に平次の対応にキレていた訳ではない。その理由は6時時間前――

「「めん新一！待つた？」

「いや、待つてねえよ。じゃあ、行くか！」

待つてなかつたわけではない。もうすでに30分待つっていた。新一は今日のデートを楽しみにしていた。だから予定より1時間も前に来てしまつたのだ。

「今日はトロピカルラングだよね！ハロウイン以来だね、ここに来るの」

「ああ、そうだな」

新一はハロウインに關してはトライアウスマがあるので多くは語らなかつた。

そして、その2時間後、新一にとつて衝撃的な事件が起つることになる。

2時間後、蘭たちは噴水のところでコーラを飲んでいた。すると、いきなり田をふさがれた。

「ああ、俺たちは誰でしょ？？」

新一には聞き覚えがある声だった。新一は向こうの要望どおり答えてやることにした。

「快斗だろ？何してんだ、こんなところで」

「当然遊びに来たに決まつてんだろ？青子と一緒にな

快斗はその後2人を見て言った。

「2人はデートか？」

新一と蘭は顔を真つ赤に染めた。快斗はそれを見てさりげなくやかした。

「おー、図星だな？さすが。ラブラブだなつー」

冷やかされて真っ赤になつてゐる新一と蘭を見て、少しためらつたが、青子はお願いをした。

「蘭ちゃん、2人でトーートなのにこんなこと言つていいのか分からないけど・・・青子と一緒に回らない?」

「「「えつ」」」

蘭だけでなく新一や快斗も驚いていた。

青子はその理由を話し始めた。

「だつて、『トーートぐらいいつでも出来るけど、青子と蘭ちゃんとはなかなか遊べないじゃん!』

「・・・いいわよ!確かになかなか青子ちゃんと遊べないもんね!..」

その後蘭は新一の前に、青子は快斗の前に立つて言った。

「じゃあ、新一。私と青子ちゃんは一緒に遊ぶからー新一は快斗君と遊んでー」

「じゃあ、快斗。青子と蘭ちゃんは一緒に遊ぶからー快斗は新一君と遊んでー」

「「「ひょりと待てよ!蘭!」」」

同時にそう叫んだが2人はもう人ごみの中に消えてしまつてゐた。

「くそつ!..おい、どうしてくれんだよー今回のトーートは2週間ぶりだつたんだんだぜ!..」

新一は快斗に当たつた。しかし快斗も新一に当たつた。

「蘭ちゃんが承諾しなかつたら俺だってもつと一緒に居れたんだよ！」

2人ははしばらく責任を擦り付け合つていたが、しばらくして新一が言った。

「待て、アイツに俺の大切さ分からせればいいんだよな？」

そして、1人でしばらくぶつぶつついていたが、いきなり顔をあげると、手招きして快斗を呼び寄せた。

「あのそ・・・

file1・初雪（後書き）

前々から言っていたクリスマスバージョンの話、書いてみました。
意外とすんなり思いついたので3話までは作ってます！

これは楽しいハロ윈パーティの続編ですが、そっちは読まなく
ても分かるようになっています！

では、お楽しみください

・・・ってなワケなんだ、どうだ?」

新一は快斗に自分の意見を言った。快斗はその話に乗り気になつた。

「いいな、それ!じゃあ、ダブルデートか?」

「いや、服部だってハロウィンには苦い思い出があるんだ。」
「三は
トリプルデートだろ」

「そうだな。じゃあ、5日後、カフェに集合な。新一は平次呼んど
いてくれ」

「ああ」

新一と快斗はそれだけ話すと、それぞれ帰つていった。

「この」ことを思い出していた新一は平次が話し始める前に、話を切り
出した。

「なあ、服部、クリスマストリプルデートしねーか?」

平次はこれに大きく反対した。

「はあ?俺は行かへん。あのときみたいになんのは嫌やし。それ
に俺はもう和葉と約束してるんや!」

新一はこの発言にとても驚いた。

「えつ！服部が！？お前は一人でクリスマスをするのかと思つてたぜ」

平次は声を荒げて言った。

「俺は同じ過ちは繰り返しどうないんや！だから行けへん。デートはダブルで頑張ってくれや」

それを聞いて、新一はケータイの前で笑つた。人を見下すような笑いで・・・
平次にはそれが癪に障つたようだつた。

「お前、なに笑うてんねん！」

新一はかつての思い出を切り出した。

「おまえなあつ・・・7月デート失敗したつて言つてたじやねえか。GWは誘いも出来なかつたつて・・・そんなやつに今回上手く行くとは思えねえよ」

平次は声が小さくなつたようだつた。

「そりやーそりやけど・・・工藤も似たり寄つたりやないか

新一は待つていたといつよに間をおき、言った。

「だ・か・ら、探偵2人と怪盗1人で考えるんだよ。優秀な3人で

考えれば、楽勝だよ

「優秀とは思へんねんけど・・・まあえわ。参加したるわーで、いつ予定立てんねや?」

新一はすぐ答えた。

「3日後だ。俺と快斗が集まつて考える」

平次は即座に突っ込んだ。

「ちよー待て!俺が入つてへんねんけどビリにこいつをや?」

「お前は冬休みが始まつてから・・・だからー8日ぐらいこひてくればそこから3人で考える」

平次は納得できな様子だった。

「何でや?俺も入れてくれや」

新一は小学生相手のような口調でなだめた。

「服部君、君はもうすぐ大学受験じゃなかつたかい?推薦で入れるとしても単位とか出席日数が足りなかつたら意味がないだろ?和葉ちゃんもそうだ」

平次はだんだん腹が立つてきたようだった。

「工藤、しゃべり方がイラつくからやめてくれ!分かつた。冬休みが始まつてからしか行かへんからーええやろ?それで」

平次はイラつきながらも理性は保たれていた。だから新一の意見も正論だと思い了承した。

「よし！で、服部の用件ってなんだつたんだ？」

「ああ、それは入試はそつちで受けたからしばらく藤の家に泊まるつてことや。和葉はどうがええやろ？」

「お前、断定してねーか？俺は貸すなんて一言も言ってねえぞ！和葉ちゃんは蘭の家で良いと思つぜーじやな」

それで電話は切られてしまった。

そこには5分26秒と刻まれていた。

「意外と短かつたんやな」

そういつた後、平次は窓を開けて空に浮かぶ満月を眺めていた。

file2・秘密の談話（後書き）

これは昨日投稿したのと同じものです。でも、1日に2話投稿するのもどうかと思ったので、今日投稿します

評価・感想お願いします！

file 3・綿密(?)な計画

5日後である12月6日、快斗と新一は集まっていた。指定していた“カフH”で・・・

「もし服部が来てもアイツには分かんねえだろ」

「ああ」

新一たちは話し合っていた。もちろんアートについて。彼らはカフH Royalにいた。

「HJは大阪の地理しか知らない服部には来れない場所だよな」

快斗はここを選んだ自分がすごいと思っていた。ここを指定するのはカツブルばっかりで、こうこうところに慣れてなさそうな平次には入れないと考えていたからだ。

快斗が自惚れしているのを新一がとがめた。

「これぐらいで喜んでたら、データコースもたいしたものじゃなくなるぜ。じゃ、考えるか」

新一はシャーペンを手に持つてパンフレットを眺めていた。2人とも静かな環境にほつとしていたHーーのもつかの間、この店内には合わない大きな音が鳴り響いた。

「うつせえな、何が起こったんだ?」

新一と快斗が顔を見合わせてくると、色黒の高校生がやつてきた。

「お前ら、俺がここに場所に来れへんと思つとつたやつ。」

「あ、ああ・・・なんでお前にここが分かつたんだ?」

平次は怪しげな笑いを浮かべた。

「お前の彼女のお陰やーー藤さどいやつて言つたら、すぐ教えてくれたで。それに今日は土曜日やしね」

「蘭ー何でばらしまつたんだー!」

新一は蘭を口止めしてこなかつたことを悔やむばかりだった。

「なんで俺を呼んかつたんやー俺が居たほうが良かつたんやないのか?」

「お前が来ると集中できないんだよーお前電話で納得したじゃねえかー!」

平次は近くにあつた椅子を引くとそこへ座つた。

「俺はよく考えたんや。そのまま工藤の言いなりになつてええんやろかつてな。だから来たつたんやーー!」

快斗がすぐさま平次に突つ込んだ。

「お前が居ると全部失敗してるから呼ばなかつたんだよー!」

「なんやどー?」

そこから3人の口論が始まった。店から追い出されるほどではなかったが、かなりうるさく、客がどんどん帰つていった。

「ほら、帰つちまつてるだりーちゃんと考えるぞーーー！」

新一が真っ先に注意した。そこから計画の立てあいが始まった。といつても行きたいところを選ぶだけだが・・・

2時間ほどして3人とも計画が立て終わったようだつた。

「よし、次は3日後に集まるぞーーー！」

それに服部が猛抗議した。

「仕方ねえだろ。俺らも忙しいんだからな

「俺のことも考えーやー！」

平次はしばらく文句しか言わなかつた。そして奇妙に笑つた後帰つて行つた。

「工藤・・・服部壊れたな・・・

「ああ・・・」

2人はまだ知らない。このとき服部が何を考えていたのかを・・・

file3・綿密(?)な計画(後書き)

久しぶりですね！

あまり投稿してませんでした・・・

今日は久しぶりに投稿します！

テストは・・・もうダメでした・・・

次はもっとやらないとダメですね・・・

次は火曜日に投稿します

では

12月9日の午後6時頃――

「よし、ソシなら100パーセント来ねえ

そう言つたのは快斗。

「いや、200パーセントだな」

と返したのは新一だつた。

「やうだな、これも新一のお陰だぜ。お前が和葉ちゃんと平次の『
一ト計画したんだからな。さすがだぜ、東の高校生探偵』

「いや、その面ならお前が手伝ってくれねえと出来なかつたんだ。
感謝してゐるぜ」

そう言つて2人はハイタッチした。

周りから見れば奇妙だつたことだつ。

格式高い店で高校生がハイタッチしたのだから・・・

「けど、これが上手く行つたのは和葉ちゃんのお陰だな」

快斗は感心していた。

「ああ、ソシまでつまくこくとまな。やつぱ、服部の為ひてのは
使えるな。じゃあ、それから始めるが」

そして、やっと作業が始まった。前回の資料をみて、データスポットを選んでいた。10分ほどして新一が言った。

「海は絶対行くぞ！あとトロ・・あ、？」

新一が横を見ると快斗が手を新一の腰に回してブルブル震えていた。

「魚だけは・・・ダメだ！」

「おー! 手を離せ! ―― わあつたよ! 自由時間作ってその時間自由にするから、な?」

その瞬間快斗の顔がパアッと輝いた。

「新一、サンキュー！」

そうして、新一に抱き着いた。

「おい。抱き着くんなら無しにすんぞ！」

この時新一からものすゞく殺氣があふれだしていた。快斗は急いで手を離した。新一は続けて言つた。

「それは2時間ぐらいいい」しました。あと、泊まりこみたいいか?」

「2日遊ぶのか。——よし、そうするか」

そして、彼らは1時間半程して行きたい所を決めた。

「――よし。あとせどり組み込むか、だな」

その時だった。

「お密様、4番にビビリやれ」

ウロイトレスが言ったようだ。新一はそれに疑問を感じた。

「待て、4番テーブルはここだー！」

快斗はすぐ番号を見た。

「ああ・・・まさか平次か！？」

「やのまさかや」

新一がはつとして後ろを見ると、色黒の男が立っていた。

「服部一和葉ちやんはビビリしたーー！」

その瞬間、平次はほくそ笑んだ。

「やつぱお前らの仕業やつたんか。ま、楽しませてやつたド

平次は快斗を振り返った。

「快斗が和葉に学校休みやて聞いたんやろ？だから、和葉にテー
トを持ち掛けたんや」

「なつ、そんなわけや・・・」

「快斗、動搖しとる。ポーカーフェイスはビリ行つたんや？」

快斗は平次に指摘されるほど動搖していた。

それは恋愛は俺に任せろと言っていたにも関わらず、失敗したかららしい。そういうことをぶつぶつ呟いていた。

平次は続けて言つた。

「今日はここまで、‘デート’したんや」

「なんでこいつて分かつたんだ？」

「それはな・・・」

平次の推理が今始まつた。

file4・消える自信・・・（後書き）

再び同じような場所での話になりましたね・・・
次に時間軸は戻りますがデートの話でも書きます。

個人的ですが、今回期末かなり悪かったので、投稿頻度は悪くなり
ます。

では、また

「・・・まあ、お前らの行動やー明らかにおかしいんや。俺が電話かけると長話するやう?お前らはな、普段は電話短いんや。あと、俺を大阪に帰す時の態度がおかしかったんやーさすがの2人も自分には鈍いからなあー」

「つそり新一はぼそつと呟いた。

「お前もな」

平次は即座に切り返してきた。

「俺は鈍うないでーちゃんと分かつてる。探偵やからな」

新一は探偵としてのプライドを傷付けられた気がして腹がたつた。

「ああ?お前はいつも和葉ちゃんと逃げられてんどう?そんな奴に探偵じやないみたいなこと言われたくないな」

2人の目に火花が散りはじめたのを見た快斗は止めにかかった。

「新一、落ち着け。平次、なんでここが分かつたんだ?」

新一はまだ苛立ちが残つてゐるようだったが、言い争いは止めた。平次はまた話を始めた。

「でな、おかしいな思つて青子ちゃんに電話したんや。黒羽、工藤と出かける予定あらへんかったか?ってな。青子ちゃんは優しいからなあ。言つてくれたで。今日出かけるつてなあ

「青子！あれほど口止めしたのに！」

行き場のない怒りを抱えた快斗に平次が思い出したよつて言つた。

「これ、快斗に土産やつて」

そう言つて平次は貝のネックレスを取り出した。

「平次、それを捨てる！」

快斗は怒鳴つた。しかし、平次は捨てなかつた。

「これは、青子ちゃんが自分で選んだ貝で作ったやつなんや。手作りやな。それを捨てるんか？」

快斗はそれを平次の手からすぐ奪い取ると、首にかけた。新一と平次が言つた。

「快斗、魚嫌いじゃなかつたか？」

「それに季節合つてへんで？」

しかし快斗はそれを離さなかつた。しかも、顔が赤く染まつていた。

「なるほど」

新一と平次は納得した。貝を見て、笑つている快斗を見た平次は、快斗を無視して、新一だけに言つた。

「最後の端は蘭ちゃんやつたら工藤の方に着いて言わへんと思つたから園子ちゃんに聞いたんや。なんか聞いてないんか、つてな。

園子ちゃんはあんまり知らへん感じやつたけど、読みは天才的や。データについての話やつたら工藤は意外と安い店にして、そこもチートのコースにいれるはず、だから、Donny'sに行くつてな

意外にも新一は疑問があるようだつた。それを平次にぶつけた。

「なあ、服部、他にも店はあるはずだ。なんでここにしたつて分かるんだ？」

「なんや、そんな事かいな。2人は親友やろ? 行きたい店ぐらい話してるやろ。それを教えてくれたんや」

新一は切れず、何か納得していた。

(成る程、園子に聞けばいいんだな)

そう思つた新一は平次に感謝した。

「ありがとな、服部、お前のお陰だ」

「はあ？」

平次は訳が分からぬようだつた。そこに快斗が割り込んできた。

「成る程、園子ちゃんも頭いいな

「快斗、夢から覚めたか？」

快斗は返事した。

「あれは貰だ。魚じゃないからな。大丈夫。あと、さつきその園子ちゃんからメールあつたんだけど、クリスマスパーティーやりたいらしい。園子ちゃんは特別にこっち側だけいいな?」

新一と平次は了承した。

「よし、仕切り直しだ。服部、ここに居ていいで。理由は事件にでもしどけ」

「よつしゃーー!じゃ、今日から上藤ん家泊まるな!」

「あ、じゃ、俺も!」

こうして、3人で住むことになった。自分達は大丈夫だろつか・・・

そんな不安もある中、デート計画は進んで行く・・・

すっかり忘れてましたよ（汗）

この投稿を。昨日[2018/01/11]急いで書きました。
心配ですっ！間違つてないですか？

あつたら教えてくださいーーそつこーーで直します！

感想など、よかつたらください！
待つてます！

そして1週間ほどたつた12月15日・・・

あれから結局平次は和葉に強制的に連行され、家に連れてかえられ、快斗も、青子に言われ、家に戻った。

平次は、和葉と痴話喧嘩しながらだつたが、意外にも、すぐ帰つていった。

「はあ。うるさい奴らがないと落ち着くな」

そこは、帝丹高校の屋上だつた。
やつづぶやきながら、うとうとしていたといひに園子がやつて來た。

「上藤君、結局いつ決めるつもつ?」

そう相談してきた。

眠いながらもちやんと返事した。

「やうだなー、20日ぐらいか? 服部はその日終業式だしな

園子はしばらく黙りこくっていたが、しばらくしたら頷いた。

「仕方ないわね。その日からね」

「じゃ、決定な。じゃ、俺は電話じとくから」

そう言つて、ケータイを取り出した。するとそのケータイを新一から取り上げた。

「工藤君、電話終わったら寝るつもりね。事件があつた事にして授業サボるつもり? あなたの姫様が心配するわよ?」

新一はすくと立ち上がる、園子からケータイを取り上げた。

「わあったよ。授業出るからー。電話はしくから安心しき」

「今日出た小説にハマつて忘れなことないことをしたよ。あと、行きたいところ決めといて」

「ああ」

そして園子はすたすたと歩いて去つていった。新一はすぐにケータイで平次に電話をかけた。平次はすぐに出た。

「なんや、工藤、用件ははよ言いや。あと一分で授業やねん」

「5分はいるだ。――――よし、お前授業サボれ!」

平次は周りの人になにか言つたようだった。

「よし、じゃ、サボつたるわー! 工藤はサボるんか?」

「ああ。園子には咎められたけどな」

平次は再び周りになにか話したあと、歩いて行つた。

「で、なんや?」

新一はさつも決めた事を話しあじめた。

「二十日はいつにかこ。蘭の話ではちよつじ木みー日田だら?」

「ああ、和葉は置いていけばええなんな?で、後の4分はなんや?」

「取りあえず、行きたい所言え。前は途中からだつたから決めてねえだろ?」

平次は間を置いて言つた。不敵な笑みをちらしながら・・・

「もつ決めてあんねや。じや、後から言ひとくわ。快斗にも回じこと詰つとナガええんやろ?」

「よく分かつたな。くれぐれもばれないよつこな

「分かつてゐるわーじや、俺はせつかく屋上こきたんやし廻寝するわーじやあな」

そう言つて電話が切られた。

「思つたよつ早く終わつたな。ま、服部が決めてたからだけ」

新一は無意識の内にさつ眩いでいた。

file6・新一の電話（後書き）

やっと書き終わりました。疲れましたね（汗）
まさか電話編でこんなに時間がかかるとは・・・
次回も同じ電話編ですが、全然違います！
今回が次回につつながる感じですかね～？

もうすぐ、冬休みです！後2日ーそれが終わったら、部活だけなので、案外早く進むと思います！！

では、今日中に、もう一話投稿しますね

一方、快斗と平次は・・・

ブルブルとポケットが振動したので、快斗はポケットからケータイを取り出した。

しかし、メールではなく、電話だったので快斗は立ち上がった。

「先生、黒羽快斗早退します!」

「ちよつと快斗、なに言つてんのよ!」

快斗はその青子の声を無視して、先生の方へ近づくと、ウインクをした。他の生徒にはよく見えなかつたようだが耳元でなにか囁いていた。

先生はそれが効いて、なにも咎めなかつた。

快斗は青子の追跡を振り切り、屋上へ行くと自分から電話をかけ直した。

「快斗か?はよ出てくれや」

「こつちも授業があつたんだよ。で、何の用だ?」

平次は先程の話をした。

「成る程な。でもどうして昼休みなした話がこんな遅くにかかつてくるんだ?」

平次は照ながら言った。

「それはな・・・・・寝が原因なんや」

「平次、もつと早くかけてくれ。そしたら青子に追いかられる」ともなかつたのに・・・・めんどかつたんだぜ」

「まあ、堪忍したつてや」

快斗は平次のその蝶り方に上手くまるめこまれてしまつた。

「仕方ないなあ。そういうや平次、俺らは予定決めた事知つてんだろ？なんか言いたいことあんじやねーか？」

それを言つた瞬間平次が黙りこくつてしまつた。それで快斗は待つことにした。

しばらくするとやつと平次が口を開いた。

「最近工藤俺に対して冷たすぎるんやないやろか。快斗との対応が全然ちやうで」

それを聞いて快斗が笑つた。

「なにがおかしいねん！」

「そんなこと簡単だる、つて思つてや」

平次は訳が分からなかつた。漫画なら頭の上にはてなが並んでいただろう。快斗は見るに見兼ねて助け船をだした。

「お前ら鶴と仲良くやつてんだろ？帰るときも楽しそうだつたしな

「まあな。でも工藤達の方がもつとええはずや」

快斗が意味深な間を置いた。そして凄く小さい声で話しあじめた。

「実は、新一が蘭ちゃん、俺が青子と一緒にテートした時、偶然新一と会つてな。女同士でくつついちまつたんだ。それからしばらく喧嘩になつたんだけど、俺んとこはより戻したんだけど、あいつはまだからな。仲いい奴を見ると腹が立つんだろーな。まあ、俺はその場にいたからキレられてねーけど」

平次は今の説明で何となく分かつたようだつた。

「要するにハつ当たりやな。だからそれをやめさすために黒羽がこんなに動いてくれてるんか？」

「そうだな・・・やっぱこんな空氣やだからな。これが直るチャンスは24日だけだ。頑張んないといけねーだろ」

「やうやな、じゅ、お互に頑張ろつせ」

そして電話は自然と終わつていた。

（工藤、意外と人間っぽいな。）

平次はそれを考へると笑いが止まらなくなつた。3人は、終業式までが、とても長く感じていた。

file7・新一の裏事情（後書き）

わざわざ言つてた分です！

快斗が新一について平次に教えます！前のよりは仲がいい感じで好きなんですがどうですか？

また、ミスとかあつたら教えてください！

ノゾムさん教えていただきありがとうございました！

では

file8・計画ミスを探せ！

とつとうー2月20日がやつて來た。

新一、快斗、平次、園子は近くのファミレスにいた。

「計画出来た？」

園子はそう言つと、3人の顔を眺め回した。

新一は一番手で話し始めた。

「俺は、取りあえず海に行きたいんだ。あそこには思い出があるからな」

快斗はその発言に違和感を感じた。

「新一、前気づかなかつたけど、冬に海はおかしいだろ」

園子は同意した。

「おかしいわね。まだ雪を見に行くとかなら分かるんだけど」

「そりや、今海に行つたつてなにも面白ことあらへん」

平次までもが言ひはじめ、新一は立場が悪くなつた。

新一は他にも、値段が高い所は禁止、蘭のことを気にしながら動く、など、様々な所を訂正された。

園子は小声で一言だけ助言した。

「蘭とより戻すには今回がチャンスよ。しつかりしなさい」

園子の友達に対する思いは新一にも伝わったようだつた。

次に平次が計画を話した。

「俺はやつぱーテークはドライブやな。途中で色々な所へ行きたいねん」

園子は真面目な顔付きになつた。

「それ、いつもじゃない！…せつかくやるんだから、新しいものを増やさないと。服部君はこっちにいない分、和葉ちゃんだつて新鮮さがあると思うわ」

「やうやな、じゃ、じばらく探さな——いや、もう時間足りひんしな……」

平次はそれからずつと考えていた。

そんな平次を無視して、快斗は話しぶじめた。

「じゃ、俺だけど、行くところはここなんだ」

そう言つて紙を見せた。園子はじばらくその紙を眺めていたが、顔をあげると頷いた。

「あの2人と違つわね。さすがーじゃ、黒羽君は安心ね」

「そこで提案なんだけど……一日田はずつとトリップルテートつて

「話だつたけど、夜は1回しか来ねえじゃん?だから夜は特別に別にしねーか?」

園子は紙に墨を落としながら言った。

「確かにね。それいいわーじゃ、変えるわよ~」

そうして、みんなのデータ計画は進んで行った。新一は蘭と仲直り出来るか?平次は新しいところを見つけられるか?快斗は計画を上手く進められるか?

file8・計画ミスを探せ！（後書き）

1日分投稿遅れています（汗）
気にしないでくださいっ！！

今回は計画どおりに進んでないので、こういったこともあると思います。が、明日からは大丈夫！！だと思います！！！

では！

とつとう一2月24日——ついに泊まりがけデーター計画が始まった。

最初に来たのは意外にも、快斗達だった。

「あいつら遅いな。なにやつてんだ?」

すると青子が強い口調で言った。

「みんな快斗と違つて忙しいの。一結局12時から始まるって言われたのに、何でこんなに早く出たの?」

「しゃーねえだら。やるいとねえんだから」

青子はひょっと考へると快斗に提案した。

「じゃあ、この時計が見えるこの店で時間潰さない?」

「ああ。青子にしてはまともな提案すんじゃねえか。」

青子は頬をふくらと膨らませた。

「青子にひょとしねなによ。」

口論をしながら行つたので、結局行くのに20分もかかってしまった。

2人はしばらく黙つていたせいか揃つて眠ってしまった。

しばらく経つて――

「…………眠いなあ…………って今何時？快斗起きて…」

青子はやつと気づいたようだつた。

快斗は青子に言われて起きたものの眠いのが見てうかがえた。

「何だよ、もう少し寝かせろ」

青子はそういわれたので時計を快斗の目の前に突き付けた。

「なんだ1時――――1時！？」

快斗はすぐ外を見た。

「あいつらこるぞ――蘭ちゃん達はともかく新一達はやべえ…」

「早くお金払わないと…」

2人は急いで店を出ると、時計台前へダッシュした。

時計台に着くと、やつぱり新一と平次は怒つていた。

「快斗、なんで遅れんだ！」

快斗が言い返す前に次は平次が言つてきた。

「俺やつて30分しか遅刻してへんで」

「平次、あなたのせいやで…！バイクの力ギ無くしたなんてアホち

やうか？」

青子は快斗が言いかえせないのにいらりしていた。そして、ついに大声を張り上げた。

「『めんなさい。青子達、1時間前に来たけどうた寝しちゃって。』

それを聞いた新一は青子を慰めた。

「青子ちゃんが心配する」とじやないさ。悪いのは快斗だよ。エスコートしねえといけなかつたんだからな」

「青子が悪いよ。つい寝ちゃつたから・・・」

「やうだよ、アホ子が悪い！」

青子はそれを聞いてキレたようだつた。

「はい？バ快斗ーあなたも悪いわよー。」

「おひと、気安くあなたなんて呼ぶなよ。夫婦と思われたら困る」「うひちだつて迷惑よー。」

2人は学校でやつているような喧嘩を始めた。平次や和葉もカギのことでもまだ言い争つていた。

新一と蘭はしばらく放つておいたが、收拾がつかないので、蘭は新一に相談した。

file9・やがてかの遅刻（後書き）

あとがきはまとめて書きおさるのでーー。

file10・2人でボーリング

まず彼らがデート場所に選んだのは、ボーリングだった。

「何で俺がやらなあかんねん」

「そんなん知らん！ あんたたちが決めたんやんか！ うちらに聞かれてもわからへんで！ それともしたくない理由があるん？ できへんとか？」

平次はその瞬間びくつとした。

和葉は勝ち誇ったような顔になった。

「ふーん。なるほどなあ。だから平次ボーリングせえへんかつたんやな」

その後、和葉は慰めてあげた。

「安心しい。うちとチームやんかー！ うちは強いでーーー！」

「任せるわ」

そういつた後、蘭が声をかけてきた。

「和葉ちゃん、服部君、始めましょう。早く来て！」

3人は、急いで新一たちのところへ行つた。

6人集まると、新一が仕切り始めた。

「じゃ、始めるぞ！ ルールは一番たくさんストライク、スペアをと

れば勝ち。スペアの2倍ストライクは点が入るつて事だ。その代わり他は点がない、いいな?」

「はあーー」

みんな前から聞いて、納得していたので文句は言わなかつた。そして新一が投球しようとしたそのとき、後ろから声が聞こえた。

「はーい!私よーー」

蘭は驚いていた。

「園子? 何で?」

園子は新一を軽くにらみつけた後言つた。

「新一君達から聞いてなかつたのね。面白そだから私も参加させてもらひことにしたの。京極さんを迎えて行かないといけなかつたから、遅れただけね」

そういうつて園子は笑つた。

和葉は園子の隣に居る真を見ていつた。

「かつこええやんー園子ちゃんの彼氏?」

その発言には真が答えた。

「園子さんがいつも思つてくんだってるなりですか? ・・」

「わいわいよ、真さん」

平次は2人の永遠に続きそうな会話を切つた。

「分かつたつて。靴は履き替えたんか？」

「もちろん。そこまでマナー悪くないわよ！」

そしてボーリング大会の火蓋が切られた。

男子一一一セット目

じやんけんの結果まず新一が投球することになった。

新一は投球体勢に入つた。そのとき声が聞こえた。

「新一、頑張れ！」

蘭の応援だ。これにより、変な力が抜けたのか、スムーズに投球した。

新一はもうボールを見ていなかつた。

100パーセント入る自信があつたから・・・

もちろん、ストライクだつた。

「新一！..すごい！..」

「よし」

快斗は冷静に見ていた。

「新一はストライクか——まあまだな。よし俺の番……」

快斗はそういうとボールを持って投球体勢に入った。

「快斗——頑張れ」

青子はやつたことが忘れられず、快斗の応援の声も小さくなつた。それで快斗は取り乱した。

「あ——！」

流れに任せて投げた球——それは6本倒しだつた。

「くそつ。普段ならもつと……」

そして間髪いれずに次の球を打つた。

「2本ね。合計8本」

園子が言つた。快斗が苛立ちを新一と平次に言つてこる間、蘭は青子を呼んだ。

「青子ちゃん、ちょっといい？」

青子は言われてそこまで走つていった。

「なーに？」

「快斗君、もつと応援してあげよつよーじゃないともつと不調になるよ。頭はす」「く」けどまだ高校生なんだから

「分かった。ありがとう蘭ちゃんーー！」

青子はすぐ戻ると快斗に「うわやいた。

「次頑張ろー！」

快斗の気持ちを鎮めるにはこれで十分だった。

「じゃ、俺やな、和葉、おれが取れへんかった分、フォロー頼むな

「任せとき」

みんな、この2人はチームワークが良いとそのとき思った。和葉は何も言わなかつたがさつきので十分だった。

平次は1投目を投げた。

「9本。惜しい！次でスペアやーー！」

「ああ。いくでー！」

2投目——ボーリング玉はゆっくりと弧を描きピンのど真ん中を打つた。

「よしー・スペアやー！」

平次たちは見事スペアをとることが出来た。いまいちぱつとした成績が出ない彼らがあんなに取れたのはすごいとみんな感心していた。

「最後は僕ですね」

真は立ち上がると、すぐにボーリング玉を投げた。

それは見事なフォームで、もちろんストライクだった。

「真さん、 もすがーー！」

「園子さんにプレッシャーがかからないようこしただけです」

みんなはこのチームは要注意と思つていた。

女子一一二セット目

まず、蘭が投球することになった。

蘭は一応プレッシャーがあるらしく、手が微妙に震えていた。新一は耳元へ行つてそつとわざやいた。

「安心しろ。俺がどうにかしてやるから」

蘭はそれで満足だった。

1球目を投げた。不安定な軌道だつたせいか7本しか倒せなかつた。2投目も健闘して、結局スペア止まりとなつたが、2人は満足そうだつた。

「次は青子かな？」

そういうて青子はボールを持つた。

「青子待て！」

快斗はそうこうと青子に言った。

「もう細かいところはいい。青子は運動神経ないからな。その代わり思いつきり投げろ！」

「分かった」

そして渾身の力をこめて投げた1発——それは見事すべてのピンを倒した。

「青子、良く出来たじゃねえか！――」

そして2人が喜びに浸り終わった頃和葉が出てきた。

「うちを見ててみ」

そういって投球した。自分で言っているだけあって、上手かった。もちろんストライクだった。

「さすが和葉！見直したで！」

そう言い、和葉と話しあおうとしたその時園子がやってきた。

「私ねーよしやるわよーー」

園子が意気込むと真は近くに来て一言だけ言った。

「園子さんは大丈夫です。自信を持つて」

「はい！」

園子は投げた。惜しくもストライクを逃し、スペアとなってしまったが、それはそれで満足そうだった。

男子一一一 最終

最終回は、今回の目的である、『自分たちは出来る』ということを教えるため、最終と入れ替えた。

結局新一＆蘭は、ストライク4本、スペア1本、快斗＆青子はストライク3本スペア4本、平次＆和葉はストライク1本、スペア4本、真＆園子はストライク4本、スペア4本となつた。

よつて真＆園子が圧勝し、平次＆和葉は負け決定なので、時間も考え、新一vs快斗だけとなつた。

新一は沈黙の中投球した。1球目では完璧に入りきらず、1本残つた。少しあせりの表情も見られたが、スペアをとることが出来た。よつて快斗たちはストライクなら勝ち、スペアなら引き分けなのでもう一回、それ以外なら負けと決まつた。そんな一大事に快斗はりえない一言を口にした。

「 - - - 青子、投げる」

「青子が！－無理よ、入んないもん」

快斗は青子に詰め寄ると言つた。

「ストライクをつき決まつただろ？自信もて！」

青子は不安だつたが勇気を出して投げた。とても不安定な軌道を描くボール——誰もが無理だと思った。しかしその瞬間ピンは倒れた。すべて・・・

「快斗！・・・」

「青子！」

2人は今まで見たこともないぐらい嬉しそうだつた。逆に新一たちは悔しそうだつたが立ち直つたようだつた。

ボーリングが終わった頃——もうすでに4時になっていた。それからトロピカルランドに行つた。

「もう5時か——。じゃ、スケート行きたいな——」

蘭がそう言つていると、新一が付けたした。

「超巨大お化け屋敷も追加。めつたに入らないんだぜ。季節外れなのにめつちゃ売れてんだからな」

「そんなことよりも言われたって、怖いものは怖いの——！」

平次は口論を止める振りをして、新一についた。

「まあ、珍しいんやつたら行こうや！ もう手に入らんかもしねへんで！」

「ええ——私達はここにいるから——」

それでも泣き蘭ん見て、新一は蘭の腕を強引に引っ張つた。

「何するのよ——！」

蘭は新一の急な行動に驚いていた。

新一はそれに気がついていないのか、そのまますんずん進んで行つた。

「新一聞いてるの？」

蘭は苛立つてきた。それを察知したのか、耳元で小さく囁いた。

「俺を信じる。怖く無いようにしてやるから」

「―――分かった

2人が納得し、お化け屋敷に入るとき、快斗は平次に言った。

「あの2人のもつれはあれだ」

平次は聞いた。

「頷いとつたのにか?」

快斗は頷いた。

「ああ、だつて間がおかしかつたからな」

「成る程な。確かにちょっとうろたえとつたな」

平次と快斗はその後相談し、新一が出てきたら聞く事にした。

「平次!! 行かんの? あんたが行きたいって言つたから付いて行つたげるんやで?」

「ああ、じゃ、行くで」

そのあとに続いて快斗達が進んで行つた。

その時、和葉と青子も気づいていたのには2人は気がしてつかなかつたのだ。

そして、真と園子は最後に行つた。

「園子さん、怖いなら、言つて下せーね」

「ええ」

そうして、全員入つていつたのだった。

――20分後――

平次と和葉は出つた。

「平次、意外と面白いな。それほど怖く無かつたし」

平次はそう言つた和葉に教えた。

「アホ。この中には4通り道があつてな、俺らが行つたのはb。余り怖くないこじや」

「へえー。そうなんや。大阪に住んどんのによく分かんなあ」

和葉は平次に感心しているようだつた。

平次は目的を達成したのでもう帰つてもいいと思つていたが、新一とのもつれを考えると、それも出来なかつた。

「ん? 工藤? ビー? や?」

新一がいな事に気づくと、2人は急いで探しはじめた。しかし心配もつかの間、新一がベンチに座つてゐるのを目撃した。

「工藤君やー。」

和葉がそう言つたあと走つて行つたので、平次は追いかけた。

そこで、2人は蘭が寝ている——いや、氣を失つている姿が目に入つた。

「蘭ちゃんどうしたん?」

和葉は新一に聞いた。

「お化け見て、氣を失つたんだ。一番怖いコースだったからな。俺がお姫様抱つこしてきた」

「お前、大胆やな。さすがや」

新一の行動に平次が感心していると後ろから声がした。

「仕方ないなあ、今日は夜はどつせフリーだし、お前らは帰れ」

新一は言われるまま、帰ろうとした。すると和葉と青子が新一に釘を刺した。

「今日中に元通りにしどきや」

「蘭ちゃんと一回ちゃんと話し合つてー。」

新一は頷くと、そそくまと帰つて行つた。

「あーあ。せつかく計画したのに。まあ、いいわ、楽しくなりそつ

だし

そう言つた人物——それは園子だつた。

「何する気だ?」

快斗は恐る恐る聞いた。

園子は自信を持つて言った。

「もちろん、蘭と新一君の修復よ!! ホテルに急いで! 私のパパの
ホテルだから話が聞こえるはずよ」

そして6人は向かつていった。果たして2人はどうなるのか?

「新一と蘭は米化ホテルの910に居た。

新一はドアを開けるとベッドに蘭を寝かしつけた。

「ふー。今日の予定が台無しだな」

新一は一人でつぶやいていた。

そして何もせずにじっとしていると寝てしまった。

「——あれ？ 何でベッドの中に？ 確かお化け屋敷で・・・」

そして先ほどのことを思い出しあしらって来た。

「新一が置いてくから悪いこのよ」

そう言つてみると隣に椅子に座つて寝ている新一を発見した。

（もしかしてここまで一人で運んでくれたのかなあ）

そう考えると今まで起きていたのが申し訳ないと思つてきた。
しかし今までのことは消化できなかつた。

「でも、前も置いていかれたから・・・」

そうつていると新一が目を覚ました。

「あ、蘭。大丈夫か？」

「へ、うん。もしかしてここまで私を運んでくれた？」

新一は静かに頷いた。

「ああ、せっかくここまで連れてきたんだ感謝しちゃう？」

新一にそう言われ、蘭は頷いた。そしてさつきから氣になっていたことを聞いた。

「新一、怖がらせなこようとするつて言つたのに何で私を置いて行つたの？」

新一はなんの事が分からなこようだった。

「だからさつきよー新一が途中でいなくなつて氣づいたらうそ居たのよ」

蘭は一生懸命話した。

新一はやつと想い出したよつだつた。

「ああ。あの時か。あん時はたまたまケータイが無くなつたから探しに行つてたんだ。戻つて来たら蘭が倒れてるから驚いたぜ」

蘭はむやみに疑つた自分に腹を立てた。しかし1ヶ月前の事は忘れなかつた。

「じゃ、この前の『テートは？あの時はジュースを買つてくるつて言つたつき戻つて来なかつたじゃない」

新一は蘭の疑いを晴らすため真剣に説明した。

「あの時は急に依頼が来たからな。一応蘭に電話したはずだけど」

「そう言われて蘭は急いで履歴を見た。

そこには新一宛てのものが残っていた。

「あ・・・ゴメン。気がつかなかつた」

新一は分かつてくれて良かつたとき思つていた。

新一は続けて話した。

「最近、蘭、態度が怖かつたから普段通りに振る舞えなかつたんだ。
・・・こんな事言つのもなんだけど、俺に甘えすぎじゃねーか？」

新一に言われ、蘭ははつとした。

「そつか、そだよね。ゴメン、新一。私、最近頼りまくつてたね。
私が悪いから・・・もつ一度やり直してくれない？元通りになりたいの」

新一は即答した。

「俺からも。じゃ、これ蘭にせるよ」

そう言つて取り出したのはネックレスだった。

「安いけど。じゃ、蘭後ろ向いてくれ」

蘭が後ろを向くと新一は丁寧にネックレスをつけた。

「どう? 新一?」

蘭は頬を赤く染めて聞いた。

「似合つてるよ、蘭」

2人はいいムードになつた。
そこに誰か入つてきた。

「誰だ!」

新一は言つた。すると意外にも声が返つて來た。

「私よ」

園子の声だ。そして入つてきた人を見てびっくりした。

「全員居るじゃねーか!!」

新一が声を張り上げたのも虚しく、みんな好きに話し始めた。

「全部見させて貰つたぜ」

快斗だ。続いて和葉の声も聞こえた。

「これやで。ビート木や」

和葉はいつも言つてみせびらかした。

「なんでお前らがー」

それには青子が答えた。

「……は園子ちゃんのお父さんのホテルだからそういうの自由なん
だって……」

新一は園子のやり方に逆に感心してしまった。

「あ、仲直りしたんやしこうか？」

「ああ、やうだな」

その日はスイートルームで宴会をした。明日のことも忘れて――

こんばんは！

突然ですが、今日は1日に4個ぐらい書いたので疲れました。間違
いあつたら教えてくださいね！－すぐ手直します－！

ボーリングのところすぐ長かったでしょ？
あれ、今日私がボーリング言つたからなんです！
長すぎるのは許してください！

あと、今日はこつち投稿したので、また会える日までは投稿してま
せん（汗）

明日はW投稿で行きますよ！－
だからこつちは今日ほど量無いですね・・・

ではまた！！

みんな昨日遅くまで起きていたせいか、最初に起きた人でさえ10時起床だった。

「もう11時じゃねーか！俺の予定が・・・」

快斗がそういって嘆いていると、新一が突っ込んだ。

「仕方ねーだろ。あんなに遅くまで起きてたんだから」

「それにこも楽しかったよーー」

蘭が思つたことを言つた。平次は何か思つたようで、みんなに言つた。

「本當は今日は自由やけど、俺らは4時に帰らなあかんからスケート行つたら自由にせーへんか？」

「さんせーー」

快斗以外納得したので、今日はとりあえずスケートに行くことになつた。

「快斗君、滑らないの？」

園子が聞くと、快斗が答えた。

「今日はリンクの調子がよくなないんだ」

快斗は最もひじへひづいた。しかし余計な事を新一が言った。

「今日は滑りやすいだ」

やつひつて快斗の周りを滑つた。園子は快斗の耳元で囁いた。

「じゃ、青子ちゃんをしつかりエスコートあるのよ」

（無理だよー俺も滑れねえんだから）

やつひつて「それを耳聴く聞き付けて来た平次が来た。

「やつひいや快斗は滑れなかつたんだっけ？」

それを耳聴く聞き付けて来た平次が来た。

「なーんや。だから快斗滑らへんかつたんやな

「俺だつて頑張れば滑れる」

平次はため息をつくと言つた。

「周りを見てみ。例えば上藤と蘭ちゃんや。あんなに優雅に滑つて
んで。もっと凄いんは園子ちゃんと京極さんや。あの2人は天才や
な。回転してんで」

快斗はそれを見てショックだった。みんな自分より上手いし、平次でさえちゃんと滑れたからだ。

ため息ばかりついていたと、青子が言った。

「私が教えてあげるよ」

そして楽しそうにスケートの時間は過ぎていったのだった。

「じゃ、今から自由時間ね」

そういうとみんな別れて行つた。

それぞれなにをするのだろうか――

みんな自分の目的地まで行く。今回の目標を果たすために――

今日はスケートです！！

私が今行きたいところですね！！

この話はどちらかっていってまじめく快斗的要素が多いですが、楽しんでもらえましたか？

次回で最後です！！
では！！

file14・みんなの行方

みんなそれぞれ何をしていたのだろうか・・・

新一 & 蘭

新一は蘭が買い物に行きたいというのを押し切り、連れてきた。

「ここのか分かるか?」

新一は蘭に訪ねた。

「え、ただの土手にしか見えないけど・・・」

新一は説明した。

「俺ら、中学の時1回喧嘩しただろ?」

蘭はその時を懐かしんだ。

「そりだつたね。あの時結局自然に仲直りして・・・あつー」

「分かつたか?あの時アーティンググレイス聞いただろ?その場所だ」

蘭は言った。

「そりだ。私達、声には出れないけど喧嘩してたから・・・」

「やつこつじ。しばらくこよひぜ」

この時はまだ気がつかなかつた。
歌つていた本人が来るなんて・・・

快斗 & 青子

2人は時計台の前まで來た。

「昨日きたよ？快斗なにしに來たの？」

青子は本当に訳が分からぬよつだつた。

「青子なら分かるんじゃねえか？」

快斗はそつ言つた。青子はしばらく考えたあと、言つた。

「分かつた！初めて会つた場所だ！！」

「ああ、ここは俺らの思い出の場所だ。時計台があつて良かつたな

快斗は自分でやつたことながらも、他人がやつたことのように言つた。

「そうだね」

そして快斗のマジックショーが始まつた。

快斗は途中で呟いた。

「「」の鐘の音は渡せねえ」

平次＆和葉

「平次、みんな思い出の場所行くみたいやけど、うち「」は「」が
に思い出なんてあんまないで。ど「」こくつもつなん?」
「黙つて付いてきーや」

そう言つて来た場所は、東都タワーだった。

「平次、「」嫌いやつたんちやうん?」

和葉は不思議そうだつた。平次は答えた。

「ある人が言つたんや。もつと新鮮な事した方がええつてな」

和葉は敏感に察知した。

「園子ちやんやう? そう言つア、ドバイス得意やからな」

図星だ。平次は頷いた。すると和葉は静かに言つた。

「やつか。じゃ、見に行こか」

そして見に行つたのだった。

これで平次は東都タワーについて考え直すことになる。

真＆園子

「真さん、私が連れて行つてあげたのに」

「ここからついて来て下せー」

しばらく経つてついたが、園子は連れて来て貰つた場所にビックリした。

「真さん、ここって武道館じゃなー?」

「はー、やうです。僕が初めて園子さんにお会いです」

真は照れながら言った。

「ここは僕の思い出の場所なんです」

園子はその言葉に驚いた。意外だつた。

「やうなんだ」

園子がぼーっとしてみると、真が言った。

「田をつぶつてくだわー」

園子が言われたとおりになると、園子の脣に真がキスをした。

「真さん?」

園子はとても照れていた。
しかし真も少しづつ照れていた。

「園子さん、僕は行かないといけません」

真は言った。園子は慌てて言った。

「私もいくわ！」

そうして2人は飛行場へ行つた。

この企画で一番楽しかったのはこの2人かもしれない。

file14・みんなの行方（後書き）

最終回をとうとう迎えてしまいました。

結構好きだったんですけどなんか残念です・・・

今回は思い出の場所に行つてもらいました！

結構そういうの好きなんですね・・・

でも新一たち一生懸命計画したけど無駄でしたね・・・

私は無計画で書いてしまったのですが・・・

無事に終わったのが奇跡です（笑）

次回作を書こうと思いつのですが、どんなのが良いですか？応募して
まーす！！

自由にどうぞ言つてくださいね！！

では（^_^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6038f/>

仕返し（？）のX'mas

2010年10月9日04時35分発行